

# こころ、からだ、いのち

中野 重行

大分大学名誉教授 / 創業育業医療コミュニケーション協会 代表 /  
臨床試験支援財団 理事長

## ●運命的ともいえる「旅人」との出会い

歳を重ねることにより、初めて見えてくるようになるものがあります。いままで思ってもみなかったことが、はっきりと見えるようになるのです。歳とともに、自分の人生についても、かなりはっきりとした形で回想することができるようになってきます。

人生は「旅」にたとえることができます。人は誰でも、人生の旅を続ける「旅人」です。旅路の中で、他の旅人とのいろいろな「出会い」が生まれます。出会った多くの旅人から影響を受けたり、他の旅人に影響を与えたりしながら、旅人は成長していきます。

人生の旅路においては、他の旅人との出会いを通じて、数々の「転機」となる体験が生まれます。人間は、旅人との「出会い」と、岐路に立ったときに選択する「転機」によって、形作られていくもののようです。

人生の「旅路」で初めて出会う旅人は、産みの母親であり、父親です。筆者にとっても、初めて出会った旅人は、産みの母親である中野和子と、父親の中野功一でした。両親との出会いは、自分の意志で選ぶこと

なかの・しげゆき 岡山大学医学部卒。スタンフォード大学医学部臨床薬理学部門に留学。大分医科大学臨床薬理学教授、大分大学医学部附属病院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。大分大学医学部創業育業医学講座教授、国際医療福祉大学大学院教授、大分大学医学部創業育業医療コミュニケーション講座教授を経て現職。日本臨床薬理学会名誉会員（元理事長）・専門医・指導医、日本臨床精神神経薬理学会名誉会員（元会長）、日本心身医学会功労会員・認定医・指導医、日本内科学会認定医、臨床試験支援財団理事長。響き合いネットワーク連絡協議会理事長として、医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ（大分、岡山、東京、長崎、山形）の企画・運営に携わっている。http://www.apmc.jp/



ができないという意味では、運命的な出会いということができます。

あまりにも私事になってしまい恐縮ですが、筆者の人生の旅路で起こったことを例にして、わかりやすく説明してみたいと思います。筆者の産みの母は、東京都内の著名な大学病院での出産であったにもかかわらず、筆者を出産した後、産褥熱に罹患し、退院できないまま40日目に亡くなってしまいました。まだ28歳という若さでした。当時は、わが国が第二次世界大戦に参戦しようかというような激動の時代であったことも重なって、筆者の生母の両親、つまり筆者にとっては、母方の祖父母が「育ての親」としての運命的な出会いをする旅人になりました。日本に初の抗菌薬であるペニシリンが入ってくるのは、第二次世界大戦の終戦後のことですので、ペニシリンが広く使用できるようになり、多くの感染症患者の命が救われるようになる以前のお話です。

育ての親として出会った祖父母は、岡山市の中心街で医院を開業していました。祖父は典型的な明治の堅物で、意志が強く、曲がったことが嫌いな理性のかたまりのような人でした。岡山大学医学部の前身にあたる岡山県医学校の内科学教授を務めた後、岡山市内で医院を開業した学究肌の人でした。一方祖母の方は、祖父とは全く逆で、文学好きで感性の豊かな人でした。筆者が大切にしている「感性」の原型は祖母から、「理性」の原型は祖父から受け継いでいるように思います。

このような運命的ともいえる旅人との出会いが、筆者を医学の道に進むように導いてくれたのです。まさに「天命」であり、医の道を歩むことは天の与えた「天職」だったのだと思います。



●人生で初めて、自分の意志で自分の行動を選択した体験

「出会い」は「別れ」を伴うのが、世の常です。産みの親も育ての親も、すでに今生の別れをしてから、相当の年月が経ちました。

人生の「旅路」においては、岐路に立って選択をする「転機」となる体験がいくつかあるものです。筆者にとっての人生の旅路を決定づけた出会いの体験は、18歳になって間もない頃に出会った石井十次（1865～1914）です。大学の受験校を最終的に決めなければならない時期に、地元新聞記事で目にした石井十次に関する記事は、感受性の豊かだった思春期の青年の心を捉えました。

石井十次は明治時代に活躍したクリスチャンの慈善事業家です。岡山孤児院と名付けられた日本初の孤児院を作った人です。いまも岡山市内の中心部に記念の跡地が残っています。現代のように社会福祉などがまだ発達していなかった頃のことです。石井十次は宮崎県高鍋町出身の方ですが、医師になることを目指して岡山県医学校（岡山大学医学部の前身）に入学したのですが、あることをきっかけに一人の孤児を預かることになり、それが2人になり、3人になり、日本全国からの孤児を次々と受け入れるようになって、最も多いときには1200人にまで達しています。その結果、医学の勉学を続けることができなくなり、医学校を中退しています。医師になることを諦めるのはよほど辛かったとみえて、未練を断ち切るために、庭に医学の教科書を集めてガソリンをかけて焼いています。それを見た奥さんは、泣き崩れたという記録が残っています。「医師になる人は、自分以外にもいる。しかし、孤児をみる人は自分しかいない。」と言った石井十次の言葉が残っています。

石井十次の影響を受けて社会貢献をするようになっ

た人の一人に、大原美術館（1930年開館）や倉敷中央病院を創った大原孫三郎（1880～1943、倉敷紡績社長）がいます。大原孫三郎の奨学金で支援されて大原美術館に所蔵されている西洋絵画を買い集めてきた画家の児島虎次郎（1881～1929）に、石井十次の一人娘が嫁いでいます。

岡山全県から優秀な学生が集まる岡山県立の進学校に在学し、実力テストで成績順にクラス編成をするような徹底した進学指導をする学校のトップクラスにいたため、教師もクラスメイトも皆、東大・京大を目指して東を向いて生活していました。石井十次との出会いは、このような価値観を根底から覆す衝撃的な体験でした。大学受験校を最終的に選択する時期にあり、東京に出たい気持ちを持ちながらも、教師の進学指導では京都大学医学部の受験を勧められていましたので、迷っていた自分がいたのですが、それまでの価値観から自由になり、スッキリとした気持ちで石井十次が学んだ岡山大学医学部で学生生活を過ごしてみたいと思い、受験校を決めることができた思い出のひとつコマだったのです。

人生で初めて、自分の意志で自分の行動を選択した体験です。「自分が必要とされていることに献身する一生」「何かを選ぶためには、何かを捨てなければならない」ということを教えてもらった忘れられない旅人が、石井十次だったのです。

それ以来、自分の生き方について迷いが出そうになっても、石井十次との出会いが「行動の原点」になっていて、この原点に立ち戻ると、迷いの気持ちは消えてしまい、すっきりとした気持ちになって次に進むことができたように思います。多感な思春期における石井十次との出会いは、筆者の人生の旅路における「行動の原点」なのです。